二種の四德

中村瑞隆

勝鬘經や涅槃經に、法身には常樂我淨の四德波羅蜜を具することを述べている。この外に、如來藏經典群には如來法身の特質として、常住(nitya, rtag-pa) 恒久(dhruva, brtan-pa) 寂靜(śiva, shi-ba) 不滅(śāśvata, gyuṅ-druṅ) が見られる。この四特質を法藏の法界無差別論、普觀の領要抄には法身の四德又は實德と呼んでいる。從つて、法身には二種の四德があるわけである。曇無讖譯の大方等無想經と西藏譯を對照して見ると、同じ個處に漢譯は前者の常樂我淨、藏譯は後者の shi-ba (śiva) 等の譯語を當てているところがある。兩四德の意義と關係はどうか。特に後者の四德說は如來藏經典成立史を見る上に一尺度となると思われるからこれを重點的に見ることにしよう。

前者の ātman を含む四德について法界無差別論には、約果の異名とし、寶性論無上依經佛性論も常樂我淨を如來藏の果義としている。これ等の經論には、大乘を謗じ輪廻に著する一闡提は菩薩の大乘法を信修することによつて淨波羅蜜の果を、五濁に於て我見を起し我執に著する外道は菩薩の般若を修することによつて我波羅蜜の果を、輪廻の苦を恐れ寂靜に愛着する聲聞は菩薩の虛空藏三昧の修習によつて樂波羅蜜の果を、他を利益することなく離世間を愛着する獨覺は菩薩の大悲を修することによつて常波羅蜜の果を得ると

し、又、無漏界に住する阿羅漢獨覺得力菩薩も無明習氣地を離れないから淨波羅蜜を得ず、無明習氣地によつて戯論の現行を具するから我波羅蜜を、意生身の現行からその滅である樂波羅蜜を、不思議變易生死を離れないから常波羅蜜を得ない。如來法身のみが自性淸淨の通相と離垢淸淨の別相によつて淨波羅蜜であり、外道の我見と聲聞の無我の邊見を離れたから我波羅蜜、習氣の相續を斷除するからと意生蘊の滅を現證するるから樂波羅蜜、斷常の邊にも墮することがないから常波羅蜜であると述べている。卽ち、常樂我淨說は如來法身が凡夫外道の謬見である四顚倒を越え、二乘の四不顚倒を過ぎ、無漏界に住する阿羅漢等も離れ得なかつた變易生死をも超過したことを示しているものである。

後者の śiva を含む四德を見るに、不增不滅經に法身は恒沙を過ぎた不離不脫不斷不異の不思議の佛法如來の功德智慧である。不變易と無盡の性質によつて常住 (nitya)、恒久の歸依處で後邊際に等しいから恒久 (dhruva)、無二法無分別の性質によつて寂靜 (śiva)、不滅と無作の性質によつて不滅 (śāśvata) であると述べている。寶性論には如來界が衆生位と菩薩位と佛位に於ても不變異であることを說く中、離垢淨な佛位に於ては如來藏は自己の本性に立つているものであつて、前際をとれば常住であるから意生身による生がなく、後際をとれば恒久であるから不思議變易死の死がない。前後際をとれば寂靜であるから無明習氣地の病がない。不滅であるから無漏業の果である異熟の老もないと。

法界無差別論疏には前者の四德と後者の四德を、寂靜を得るは是れ淨德であり、常住は是れ常德、不變は是れ我德、不斷は是れ樂德であると配當している。何故その樣に配當し得るか述べていないけ

れども、無明習氣地と三種意生身の無を軸に考察すればかくなると考えられる。前者の四德は五濫に對する凡夫地に於ける顚倒の常想常執我想我執等ではなく、空亦復空としての四德波羅蜜である、後の四德は無垢清淨光淨な如來藏が佛地に住することに於て說かれたものである。

後者の四德は西藏譯如來藏經典に中多く見られるが、漢譯では譯語の不統一と略形と思われるものもあり見分けることが困難である。この四德には不定型と定型があり、又初め法身の四德として用いられたものがやがて如來藏の四德として論ぜられている。

先づ、如來藏經の舊譯と西藏譯には法身にも四德にも關說しない。新譯に至つて法身と三身の語句も見られ、更に如來藏が寂靜を缺く三德のあることを說いている。次に六卷泥洹經の漢藏兩譯と大般涅槃經の相當部分を見るに、數多くを數えるが、六卷本と大本は不定型で四德ではないが、西藏譯は不定型と定型化した四德をあげ如來の特質としている。勝鬘經は三ヶ處あつて、(イ)法身の德として舊譯では śiva の德が見られないが、三德をあげ、藏譯は śāśvata の代りに amṛta を入れ四德とし、新譯は四德である。(ロ)法身の德として漢譯は一德、藏譯は二德、この文を寶性論に引用しているがそこでは梵漢藏共に四德となり、(ハ)如來藏の功德として śiva を缺く三德をあげ、この文は法界無差別論や寶性論に引用され、共に四德となつている。(ロ)(ハ)によつて無差別論寶性論に引用された勝鬘經は增補されたものとも考え得るが、造論の頃は四德が定型化しており、造論者に歸せられるべきものではないかと考える。經末に一經の綱領を十五の經名によつて揭げているが、その中、漢譯に不定型であるのが藏譯に定型化されているのが見られる。不增不減經の漢譯及び寶性論引用の梵藏漢の文にはその理由論理と共に定型化した法身の四德を述べ、大方等無想經には如來とは法身であると言い、數多くの定型化の四德を說いている。

如來藏經に於ては衆生は煩惱に纏縛されているにも拘らず、如來藏を具することによつて法身菩提えの論理的根據となしたのであるが、nitya, dhruva 等を特質とする法身が確立されるに至つて、直ちに法身に於て六道の衆生も六波羅蜜修行の菩薩も離煩惱の佛も論ぜられることとなつた。卽ち衆生と法身とは互覆互藏の關係に立つこととなつたのである。從つて、最初期の如來藏經典では如來藏は衆生と法身の媒介者であつて、如來藏は在纏、法身は出纏であつたが、法身思想が確立するに至つて、如來法身が慈悲という關係から衆生と拘わるのでなく、性の立場から衆生の所依性となつたのである。寶性論（對照本四九頁）「一切衆生の中に如來法身が遍滿する義によつて」如來法身は衆生が本來具有する住自性佛性の意となつたのである。

求那跋陀羅譯の大法鼓經には常住と不滅の二德をあげ藏譯には四德をあげている。又楞伽經の梵藏には如來藏の四德となつており、一切衆生身中にありとしている。求那跋陀羅譯は單に常住不變の二德、菩提流支實叉難陀譯には共に四德をあげている。求那跋陀羅と菩提流支の渡支前後から見て、求那跋陀羅の傳持した梵本だけが二德であつたとは考え難い。しかしながら、この四德說は必ずしもその儘繼承されていないものがある。大乘央掘摩羅經には法身如來藏の四德が所々に說かれているが、或は dhruva 或は śiva を缺き paramārtha-kāya 又は śāśvata-vara を入れている。多くの法身の功德を說くに至つて列擧の仕方が異つて來たものと思われる。